

編集後記

- ここに『西南学院史紀要』第9号をお届けするとともに、ご多忙の中、執筆にご協力くださいました皆さまに心よりお礼を申し上げます。
- 今年の1月に西南学院のホームページで登録された創立100周年記念式典までのカウントダウンも始まったが、この号は、記念すべき100周年に向けて、避けては通れない「戦争」という課題に取り組んだ「西南学院学徒出陣戦没者追悼記念式」を主に取り上げた。
- 「西南学院と戦争」検討委員会による「西南学院学徒出陣戦没者追悼記念式」の報告では、この追悼記念式の実施の経緯や意義などについて伊原常任理事に執筆してもらった。その中で「学徒出陣という悲しい出来事を忘れないように、覚え、心に刻むことが必要」で、過ちを繰り返さないことが重要と語られた。また同理事は、当日の「聖書朗読・祈祷」も担当され、西南学院としての追悼の祈りを捧げられた。
- 追悼記念式の「式辞」の中で、寺園名誉顧問が「学院としての戦争責任または戦後責任を表明することが必要である」と深い反省をもって語られたことばは重く、また、「国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」というイザヤ書の聖句が戦没者への誠実な答えだという考え方が印象的だった。
- 追悼記念式の最後に、吉田理事長が実行委員長として挨拶を行った。吉田理事長には「巻頭言」もご執筆いただき、「学生ボランティアやプロジェクトなどを通して地域に開かれ、愛されなければならない」と将来の進むべき方向性を示していただいた。
- また、追悼記念式の終了後に行われた懇談会で、坂本氏がラグビー部の80年史をまとめる上で不思議に感じていたことがあったと語ったが、それは、ある年に戦没者が集中していたことであった。坂本氏は、それが学徒出陣によると気づいたことが追悼記念式のきっかけになったという。同式の開催まで10年もご苦労があったことに感謝したい。
- 田村先生には、「西南学院と文化・メディア」をテーマにご執筆いただいた。その中で、本学院のOBで環境庁の高級官僚であり、弱者とともに生きようとした山内さんの心に中学時代に慣れ親しんだ聖書のことばがあったのではないかと感じた。
- 「大学紛争」と「国際交流」という2つの大きな出来事を経験された原田先生に大学での思い出をご執筆いただいた。国際交流委員長や委員などを歴任されただけに国際交流の発足の経緯とその後の曲折ある発展について書かれた貴重な原稿である。
- 昨年の8月、職員夏期修養会の井上先生の講話を収録させていただいた。舞鶴幼稚園と早緑子供の園の誕生から現在に至るまで、多数の写真を使いながら分かりやすく説明された。
- 高等学部卒業の渡邊氏を佐世保市に訪ねたが、渡邊氏の学生時代は、「直線会」というグループを作って、「寄り道せずまっすぐ歩こうと誓い合った仲間ができたことも大きかった」ということで、「西南に育てられた」と熱く思い出を語られた。
- 今回も赤司氏に波多野培根の『無迹庵日誌』の紹介をお願いした。この日誌は、西南学院史の基礎的研究の対象というだけではなく、「史料的価値に加え、普遍的な価値のある味わい深いもの」であることを教えられた。
- 西南学院創立100周年もあと2年後に迫ってきた。大きな目的である「西南学院百年史」の編纂に向けて、発行を重ねているこの紀要が少しでもお役に立てればと思う。
- 最後に、2012年10月より英文資料の翻訳等にご協力いただいていた鶴身淳一郎氏が今年の2月20日に急逝された。これまでのお働きに感謝するとともに、心からご冥福をお祈りいたします。

(神戸口)